

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 26 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770138

研究課題名(和文)モダリティ表現の特徴及び分布：機能範疇・補文標識の役割の視点から

研究課題名(英文)The Characteristics and Distribution of Modality Expressions: in view of the roles of Functional Categories and Complementizers

研究代表者

宗像 孝 (Munakata, Takashi)

横浜国立大学・環境情報研究科(研究院)・非常勤研究員

研究者番号：70637941

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語で主動詞が従属節内に、主動詞の意味に応じ、特定のモダリティ表現を要求する統語現象に焦点を当て、研究を進めた。特に、モダリティ表現の解釈を決定するモーダル基盤を活用し、この種の主動詞が疑問詞節を導入する「か」や名詞節を導入する「の」と共起しないことに注目した。その上で、モーダル基盤とForceに密接な関係があるという先行研究(Portner 2009)に着目し、Forceと主動詞の関係が阻害されるので、上記の統語現象が導かれることを示した。CP領域の機能範疇であるForceがモダリティ表現の解釈に役割を果たしていることを示し、統語構造がモダリティ表現の解釈に関係することを示した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to derive the source of the interpretations of modal expressions and functional categories within the CP domain from modal base and relevant syntactic phenomena.

Focused on matrix verbs which requires modality expressions of a particular type in embedded clauses, it clarifies the syntactic relationship between the matrix verbs and Force head, on which it claims the value of modal base appears. Then, it suggests Force head is connected with matrix verbs syntactically, providing the bridge between them and modal base through it. This makes the head of Force indispensable so that modal expressions are given interpretation, because the value of modal base semantically determines the interpretations of these expressions under its scope. Thus, when ForceP is unprojected or occupied by other items, it follows that modality interpretations cannot be obtained, because the matrix verbs can select only subordinate clauses with ForceP projected and its head unoccupied.

研究分野：理論言語学(生成文法統語論)

キーワード：生成文法 統語論 モダリティ表現 補文構造 modal base CP領域・機能範疇

## 1. 研究開始当初の背景

(1) イタリア語を中心に、主文構造及び補文構造に存在する補文構造 (CP) を InfP や ForceP など、四種類に分けた分離 CP 仮説 (Rizzi 1997) の研究が進み、役割に応じて、統語構造において、先端に位置する機能範疇の分類が確立されてきた。この研究の延長線上として、CP 領域の言語地図作成研究が盛んになり、各言語において、モダリティに関係する表現の統語研究と機能範疇の関係を基に、CP 領域の機能範疇を細分化し、特定する一連の研究がなされている。この流れを受けて、イタリア語などの研究を援用し、Endo や Ueda, Saito & Haraguchi などが一連の研究により、日本語のモダリティ表現と CP 領域の機能範疇の関係について精査し、モダリティ表現の属性と意味特性に依って、これらの表現が位置する機能範疇を明らかにし、一定の成果を得た。しかしながら、補文構造におけるモダリティ表現については、一切の統語研究がなされていない。

上記に示すように、主文構造のモダリティ表現の研究により、統語構造がある程度、明示され、モダリティ表現の研究を進める上で一定の基盤が作られ、主文構造のモダリティ表現の研究から、補文構造においても、モダリティ表現の意味特性や機能を基に、統語構造の機能範疇の階層関係を調査する下地が出来ている。本研究は、この研究基盤を基にして、今まで余り研究がなされていなかった従属節のモダリティ表現を研究対象とし、従属節に特定の種類のモーダルを要求する主動詞を用い、従属節を構成する補文構造におけるモダリティの特性を明らかにすることを目的とする。

(2) 主文と補文構造の統語構造の規模について、Rizzi 以来、不定詞を核とする不定型節が Fin を中心に派生するのに対し、that などの定型節は Force を含むと言う仮説が確立している。日本語では、Rizzi を始めとした様々な研究者の諸言語の調査などで得られた結果から、最近の Saito の一連の詳細な研究では、Rizzi が提唱した CP 領域分離機能範疇仮説が採用した。Saito は「の」が Fin の主要部を占め、疑問を選択する「か」が Force の主要部として機能することを示し、「と」が一番上に位置する Report P の主部であるとし、補文構造の階層関係を明らかにしている。

又、Endo や Saito & Haraguchi, Ueda などは、日本語のモダリティ表現は属するモーダルの種類により、統語上の振る舞いが異なることを示しており、モダリティ表現の意味特性が統語に影響を与えることを示唆している。

上記に示したように、従来進んでいたモダリティ表現の研究だけではなく、補文構造の CP 領域の統語構造の階層体系の研究が進んでいることから、それぞれの研究成果を組み合わせることにより、補文構造でもモダリテ

ィ表現に関する研究を進めることが可能になって来ている。

(3) Kratzer や Brennan などの一連の分析により、モダリティ表現の解釈には、modal base (モーダル基盤) と modal force 及び ordering source が重要な役割を果たすことが明らかになった。

又、Portner (2009) は、従属節において、認識様態のモーダル (epistemic modal) 基盤と規範のモーダル (deontic modal) の解釈に主動詞が関与する例を示し、動詞の意味特性及び動詞が選択する節の属性など統語の諸条件がモダリティ表現の解釈に関与することを示した。以下の a と b に、主動詞が認識様態のモーダル基盤の解釈に関与する例を示す。

- a. It is surprising that the victim must have known the killer.
- b. The police told reporters that the victim must have known the killer.

加えて、Portner はモーダル基盤と CP 領域分離機能範疇仮説において、統語構造内で最上位に位置する Force が関係していることを示唆した。(1)と(2)に示したように、Force というのは、CP 領域の機能範疇において、重要な役割を果たしているおとを考えると、統語構造でも機能範疇がモダリティ表現の解釈に貢献する可能性があり、ゆえに補文構造においてモダリティ表現の統語上の振る舞いを研究することが重要な課題と考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 従属節内にモダリティ表現を要求する主動詞の意味特性を調べ、モーダル基盤との関係を明らかにし、モーダル基盤が影響を与えている統語上の役割を示す。

(2) 従属節内の補文構造の階層関係を基に、モダリティ表現の解釈と機能範疇の関係を明らかにする。

その上で、モダリティ表現の解釈に置いて、機能範疇及び統語構造の階層性が果たしている機能を明示する。

(3) 意味の特性を考慮に入れて、補文構造内におけるモダリティ表現の統語上の特性を精査し、明示する。

## 3. 研究の方法

(1) モーダル基盤に関連する文献及び日英語の他に、モダリティ表現が豊富な言語を中心に言語データなどの資料を収集し、整理・分析を行った。

(2) 最終年度に、国内及び海外から関連する言語事象の研究で秀でた成果を出している第一線の研究者を招聘し、国際ワークショップを開催し、本プロジェクトの趣旨に係る様々な側面から本研究プロジェクトを精査し、内容を深化させた。

(3) 代表研究者がワークショップの前後に招聘した講師と研究成果について積極的に情報交換を行い、関連する学術的な情報提供を受け、研究内容の幅を広げた。特に、ロンドン大学の須藤講師とはワークショップの前後に、3回研究打ち合わせを行った他に、メールにてやりとりを行い、意味論を中心に洞察が深く、本研究の進展につながる大変有意義な情報提供を受けた。

(4) 国内学会と国際学会にて、研究代表者が進行中の研究及び研究成果を発表し、国際的な研究者を含め、参加している研究者と個々の成果について、徹底的に議論し、多様なコメントを集めることで、研究内容を詳細に検討し発展させた。又、国際学会を含め、国内の学会に参加し、関連する最先端の研究を参照し、研究内容の幅を広げ、研究プロジェクトを推し進めた。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究において、動詞によって、その動詞が有する意味特性に応じて、対応したモダリティ表現を要求することを示した。例えば、「宣告する」という動詞は規範に則って命題を課すことになるので、下記のように、従属節の動詞には、規範的モダリティの解釈を有する「べき」の表出を要求し、認識様態の解釈になる「はず」が従属節に出現した場合は非文になる。

- i. 学長は大学が雅に(学則に基づいて)処分を与える[べき/\*はず]だと宣告した

一方、「信じ込む」というのは、主語の信念に基づくので、認識様態のモダリティの解釈を有する「はず」が従属節の動詞に付随することを要求し、代わりに「べき」が動詞の後に現れると、非文になる。

- ii. 学長は雅が(専門家の意見を基に)演劇祭に出られる[はず/\*べき]だと信じ込んでいる

以上の現象は、これらの主動詞は従属節に特定のモダリティの解釈を要求することを示しており、Kratzer、Brennan、Portnerの研究に従えば、それぞれの意味特性に適合したモダリティが従属節にて影響を与える必要性を示している。

(2) Saito は、Rizzi の CP 領域分離機能範疇仮説を受けて、一連の研究において、日本語の補文の階層構造は以下のように規定している。

- iii. [CP .... [CP .... [CP .... [TP ... T] Fin (no)] Force (ka) Report (to)

(1)で見た特定のモダリティ環境を要求する「宣告する」(規範的モダリティ)や「信

じ込む」(認識様態のモダリティ)といった動詞は、以下のように Fin の主要部を占める「の」や Force の主要部を占める「か」が導入する補文構造から構成される従属節を選択することは不可能であり、文全体が非文として判断される。

- iv. \*学長は、大学が雅に(学則に基づいて)処分を与えるべきなのを宣告した

- v. \*学長は、雅が(専門家の意見を基に)演劇祭に出られるはずなのを信じ込んでいる

- vi. \*学長は、大学が雅に(学則に基づいて)処分を与えるべきかを宣告した

- vii \*学長は、雅が(専門家の意見を基に)演劇祭に出られるはずかを予想している

上記の例文の非文性に対し、統語構造に置いて Force がモダリティに影響を与えている可能性を示唆した Portner の観察に則り、本研究では、統語構造上、補文構造における Force の主要部にモダリティの値があると仮定した。

以上の提案に基づき、分析すると、iv と v が非文なのは、iii に見るように、「の」が導入する補文構造は、Fin の主要部に位置する「の」が最大投射になり、それより上位に位置する ForceP まで投射されないため、Force の主要部に存在するべきであるモダリティの値が存在できないために、モダリティの値を設定するのが不可能になるためである。

次に、vi と vii が非文になるのは、Force の値が「か」により、従属節を構成する補文構造にある Force の値が疑問と設定され、モダリティの値の設定を邪魔してしまい、モダリティの値を設定されないため、主動詞との選択条件を満たせないという理由から説明される。

更に、本分析では、Force で決定されたモダリティの値と作用域にあるモダリティ表現の意味特性が一致する場合に、適切に解釈されることになる。ゆえに、主動詞の意味特性とモダリティの値が一致していない場合、i と ii の文法性が悪くなることを予測できる。

(3) 本研究の成果として、従属節を構成する補文構造におけるモダリティ表現の解釈にモダリティが関与し、CP 領域の機能範疇の最上位に位置する Force が統語的に役割を果たしていることを示したことが第一に上げられる。

又、主動詞の補文構造の選択と ForceP の主要部の表出を結び付け、統語的にモダリティとモダリティ表現の解釈の関係づけたことを示し、補文構造において ForceP がモ

ダリティ表現の解釈に対して役割を示し、統語上の現象がモダリティ表現の解釈に関与することを示唆したことも研究上の成果としてあげられる。

最後に機能範疇とモダリティ表現の解釈の関係性を示し、従属節にモダリティ表現を要求する主動詞が選択する補文構造が ForceP を含まなければいけないことを明確に示したことも研究上の成果が上げられる。

今後は、多様なモダリティ表現を扱い、意味特性や機能範疇の関係など、モダリティ表現の特性について、言語比較研究を通し明らかにし、本研究の成果を更なる整備することが望まれる。

(4) 昨今のミニマリスト・プログラムの枠組において、主動詞と補文構造の選択において、ラベルの重要性が注目されているが、本研究は Force にモーダル基盤の値があり、主動詞の選択に関係することを示しており、モーダル基盤の値がラベルと関係する方向性を開いているので、最新の理論につながるものである。本研究では、以上の選択に一致現象が関与する可能性を示し、それにより補文構造のラベルが決定されるという分析を示し、今後のラベルの役割など統語計算の本質にモダリティ表現の研究が貢献する可能性を示した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 0 件)

〔学会発表〕 (計 2 件)

1. Takashi Munakata, Syntactic Cartography Plays a Role: Modal Environment in Subordinate Clauses, International Workshop on Syntactic Cartography 2015, 2015/12/6, 北京語言大学
2. 宗像 孝, 埋め込み節におけるモーダル表現と機能範疇及び主動詞の選択条件の関係について, 日本言語学会 150 回大会, 2014/11/15, 愛媛大学

〔図書〕 (計 1 件)

Takashi Munakata (他多数と共著), Syntactic Cartography Plays a Role: Modal Environment in Subordinate Clauses, Proceedings of IWSC2015, to appear

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

宗像 孝 (Takashi Munakata)

横浜国立大学・環境情報研究院・非常勤教員

研究者番号: 70637941